

カンボジア：王党派諸党の動きとラナリットの今後

著者	天川 直子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジアの出来事
ページ	1-2
発行年	2007-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00049605

カンボジア 王党派諸党の動きとラナリットの今後

アジアの出来事

アジア

天川 直子

王党派は再び分裂した。かつて 1995 年 5 月、フンシンベック党はノロドム・ラナリットと対立したサム・ランシーを除名した。サム・ランシーはすぐにクメール国民党(現サム・ランシー党)を結成した。それから 10 年あまり、今回排除されたのはラナリットであった。

2006 年 10 月、フンシンベック党(FUNCINPEC)は臨時党大会を開いて、ラナリットを党首から解任した。この決定に反発したラナリットは翌月に ノロドム・ラナリット党を結成し、自ら党首に就任した。なお、ラナリットは同年 3 月に国会議長などを辞任して以来、フランスなどの海外で過ごしていたが、この時も帰国しなかった。

2007 年 4 月には第 2 回地方評議会選挙が行われた。人民党が圧倒的な勝利を収め、全国 1621 村中、1591 村で第 1 党となった。王党派が押さえたのは わずかにサム・ランシー党が 28 村、フンシンベック党が 2 村のみであった。得票率で見ると、人民党が約 61%、サム・ランシー党が約 25%、フンシンベック党が約 9%、ノロドム・ラナリット党が約 5%という結果であった。

地方評議会選挙の惨敗を見て、シソワット・トミコが「王党派は再集結しなければならない」と主張し、5 月には自らが党首を務める人民社会主義共同体戦線党 をノロドム・ラナリット党に合流させた。フンシンベック党とサム・ランシー党はこの呼びかけには冷ややかに応えた。フンシンベック党報道官は「一般的な議論は歓迎する」としながらも、「フンシンベック党は連立政権のパートナーである人民党以外の政党と同盟するつもりはない」と発言した。サム・ランシー党首 のサム・ランシーも「議論を深めることは歓迎する」としながらも「草の根の人民はフンシンベック党もノロドム・ラナリット党も信頼していない」と批判した。

7 月には、トミコがノロドム・ラナリット党を辞めてフンシンベック党に入党し、ラナリットにフンシンベック党への復党を呼びかけたり、ラナリットの復党を認めるようにフンシンベック党内で活動したりしたが、彼のスタンドプレーは両党から明確に否定された。8 月末、ラナリットは声明文を発表し、「フンシンベック党に戻るつもりはない」と改めて宣言した。

この分裂の果てに行き着くのは何処か。フンシンベック党は 1993 年制憲議会選挙で人民党を押さえて第 1 党となったが、選挙の度に国民の支持を減らしてきた。第 2 回地方評議会選挙の結果を見る限り、2008 年の第 4 回総選挙ではさらに議席を減らし、おそらくサム・ランシー党の後塵を拝すると思われる。

一方、ラナリットの政治家生命の先行きも暗い。本人の資質もさることながら、カンボジアでは王族というだけでは政治力を持ち得ない時代が訪れつつある。サム・ランシー党はすでに都市部の若者や労働組

合等の支持を得ている。フンシンペック党は今回の分裂によって王族ではない政治家が主流を占めるようになった。早晩、「王党派」という政治的カテゴリーは意味をなさなくなるだろう。

2007 年 10 月